

Death Education に関する 研究について

鈴木恵三、曾我部恵美子、松橋みつ江、
曾我部輝子、井原彰一

要約：小児の[Death Education]が成人のそれよりも一層難しいことは、言うまでもないことである。その難しさはどこにあるのであろうか。それは、小児にとって死は通常は起こり得ないこととして捉えられているからであり、この小児の[Death Education]が多くの領域（医学、心理学、教育学、宗教学、社会学）にまたがらざるを得ないという必然性に基づいている。この問題に対する基礎は、小児の人格を深く理解することにあるが、特に小児の死の受容と自我発達の関連性、及び小児が自己の歴史性と永遠性をどのように生きているのかという点について探究してみたい。

見出し語：人格の特徴と死。

研究課題：

A. 人格の定義。

[Death Education]の問題は、根本的には人格の問題であり、成人の場合と小児の場合とを問わず、人格をどのように理解するかが鍵となる。それ故、先ず人格の基礎的な理解を深めることが重要となる。ポエティウスは人格を定義して次のように言っている。「人格とは理性

的本性を有する個別の実体である」

(*Persona est rationalis naturae individua substantia*)。この古典的な人格の定義が意味するところを探究することにより、人格の特徴を浮き彫りにすることができると思われる。そして更に、その人格が病の状態に陥ったとき、あ

るいは死を目前にしたときに、どのような変化が生じるのかを明らかにすることができるであろう。

死は老若男女を問わず、全ての人間が避けて通ることのできない課題であり、この課題に取り組むことにより、その人の人格がより完成する方向に歩む可能性を探ってみたい。

B. 小児の死の受容と自我発達の関連性

エリクソンは、ライフ・サイクルにおける自我発達の八年代の最後の第八年代（成人期後期）において達成されるものとして、完全性を示している。人格的成熟がその時期にもたらすものとしては、過去、現在、未来の連続性の喜び、自己の人生周期と生きざまの受容、人生の必然性に協力することの学び、完璧で分離されず、壊されていない状態や性質、全体性、死はその痛みを失うというものである。これに対して、人格的にふさわしい成熟を遂げることができなかった場合には、成人期後期に待ち受けているのは、絶望、時間の短さ、人間存在の無意味さ、自己と他者への不信感、もっと有利な人生周期の第二のチャンスへの願望、世界秩序や精神的意味についての無感覚、死への恐怖などである。

小児が死に直面するという状況は、自我発達の視点からするならば、第三、四、五年代から一足飛びに第八年代に跳躍

することを意味する。第六、七年代という通常の場合なら四十年から五十年にもわたる人生の周期を生きずに、どのようにして第八年代においてもたらされる人格的な成熟さを達成することができるのであろうか。

生きられる時間の密度を考えると、小児の場合は成人の場合よりはるかに密度が濃いのであるから、時間的には短くとも何らかの仕方で第六、七年代に相当する生が小児の内的世界の中で営まれていることも考えられる。

小児は大人の縮小ではない。小児には小児の独自の世界があり、大人の場合と比較することのできないものである。その独自性の中であって、死という人類の共通で永遠の課題にどのようにかかわるのか、その営みを通して人間存在の深みが現れるのではないかと思われる。

C. 小児は自己の歴史性と永遠性をどのように生きているのか。

存在論的な地平では、その人の存在のかけがえのなさ（他の人間によって置き換えることのできないもの、非譲与性）が人格の根底にあるとすることができる。その個別的な存在の現実における現れとして、その人の歴史があるのである。小児にとって、病という受け入れにくい歴史的現実の中で、自己の個別性へのまなざしが磨かれてゆく課程は、常に感動

的である。

そして、人間の存在においてこのような個別性、非譲与性、歴史性という次元と同時に、普遍性、共同体性、永遠性、人間の本質という次元があることも確かである。この両者は、矛盾したり、対立するものではなく、相互補足的な関係にあるのであり、しばしば通常の成人の場合よりも、小児の場合にこうした人間存在の幅の広がりがあり、より明確にされることがある。小児が死に直面しながら生きるとき、この視点においてどのような営みがなされているのであろうか。この点を探究することにより、小児のターミナル・ケアを深める視野が開かれるであろう。

研究方法

研究班の各々が文献、資料を分析、考察し、ゼミナールを中心に課題を深めて行くこととする。

参考文献

- バイオエシックスの基礎づけ
H.T.エンゲルハート(加藤、飯田訳)
朝日出版社
- Summa Theologiae
Thomas Aquinas, Edidit Commisio
Piana, Ottawa, Canada.
- Spiritual Life of Children
Coles.
- 失われゆく命の尊厳
多井一雄他 いのちのことば社
- 人格心理学、上下
オルポート(今田訳)誠信書房



検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用
論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります



要約：

小児の [Death Education] が成人のそれよりも一層難しいことは、言うまでもないことである。その難しさはどこにあるのであろうか。それは、小児にとって死は通常は起こり得ないこととして捉えられているからであり、この小児の [Death Education] が多くの領域(医学、心理学、教育学、宗教学、社会学)にまたがらざるを得ないという必然性に基づいている。この問題に対する基礎は、小児の人格を深く理解することにあるが、特に小児の死の受容と自我発達の関連性、及び小児が自己の歴史性と永遠性をどのように生きているのかという点について探究してみたい。